歴史地理学野外研究　第13号　77～100　2009

廻船寄港地御手洗町の繁栄とそのなごり
― 昭和20年代以前の景観と住民の暮らしの復原を通して ―

清水　克志

Ⅰ　はじめに

御手洗町（現，広島県呉市）は，瀬戸内海のほぼ中央に位置する芸予諸島の一島，大崎下島の東端部を占める港町である（第１図）。近世初頭の西廻り航路の発達によって，瀬戸内海の海上交通ルートは，竹原や忠海を通航する中世以前の「安芸地乗り」から，内海の中央部をより短距離で結ぶ「沖乗り」へと変化した。御手洗は，潮流の緩やかさや防風可能な山の存在など，寄港地として好適な自然条件に恵まれたこともあって，この「沖乗り」ルートの要衝として，近世に形成され，急速に発達した港町である。御手洗港は，後述するように，参勤交代の西国諸大名や北前船が停泊し，広島藩公許の御茶屋が複数建ち並んで殷賑を極め，その活況は「中国無双」と謳われるほどであった。

御手洗町の盛衰に関する既往研究としては，まず，後藤陽一によって編纂された御手洗町の通史である『瀬戸内御手洗港の歴史[1)]』が特筆される。また，谷沢　明[2)]が瀬戸内を代表する港町のひとつとして御手洗町を取り上げ，港町の形成過程と景観について記述している。さらに近年では，『豊町史[3)]』が刊行されるなど，御手洗町に関する研究が蓄積されつつある。これらの研究によれば，近世において急速に発展した御手洗町は，明治以降，近代化の進展に伴って著しく衰退したといわれてきた[4)]。その一方で，木村吉聡[5)]は，昭和33年（1958）の売春防止法施行まで，御手洗町に在住した芸娼妓の存在が，町に繁栄と活況をもたらしていたことを指摘している。実際，筆者らも現地を訪ね，古老からの聞き取りを行う中で，御手洗町が，売春防止法施行以前において一定の活況を呈していたとする，木村の指摘を十分追認することができた。

そこで本稿では，売春防止法施行の直前にあたる昭和20年代以前の御手洗町を主たる分析対象とし，この時代の景観や暮らしの復原を通して，かつての廻船寄港地として繁栄のなごりを留めていた時代の特徴を明らかにすることを目的とする。そのための具体的な分析手順として，まずⅡでは，既往研究の成果を踏まえ，御手洗町の形成から拡大，衰退の過程を概観する。そのうえでⅢでは，昭和20年代以前と昭和30年代以降の御手洗町の景観復原を通して，活況を呈していた昭和20年代以前の御手洗町の空間構造を提示する。続くⅣでは，昭和20年代前後の御手洗町の商家の食生活を，周辺村落と比較しつつ検討し，住民の暮らしぶりにみられる町の特徴を提示することとする。

Ⅱ　港町御手洗の盛衰の概要

1）近世における御手洗町の形成と拡大

御手洗はもともと，大崎下島のほぼ中央に聳える一峰寺山から北東へ伸びる尾根が，弁天の尾根，天神の尾根，千砂子の尾根の三本に分かれて海へ落ち込む，狭小な海岸であった（第２図）。近世初頭まで御手洗は，安芸国豊田郡大長村の一部として，主に耕地として利用されるに過ぎなかった。17世紀に「沖乗り」の発達に伴って島の沿岸を船が航行するようになると，船への物資供給の必要から，広島藩は，寛文６年（1666）に御手洗の耕地を屋敷地にすることを許可した（第１表）。これによって延宝年間（1673～81）には大長村から18軒の商人が，また貞享２年（1685）には大崎下島の島外からも商人が御手洗へ移住し，

第１図　研究対象地域
（国土地理院発行2.5万分１地形図「大長」（大正14年測図，平成19年更新）ほかにより作成）

天神の尾根の突端を中心に，初期的な集落が形成され始めた。天神の尾根は，三本の尾根の中で，最も傾斜が緩やかで，その突端部は，広い砂州状の磯を形成していた[6)]。

18世紀初頭の正徳３年（1713）には，御手洗町年寄役が設置され，港町としての地位が確立したとされる。また町年寄の設置と前後して，天神の尾根の先端に勧請された恵比寿神社の建て替えや，弁天の尾根と天神の尾根の間の海岸線の埋立てが行なわれるなど，町並みの整備が一層進んだ。さらに広島藩によって，若胡屋（享保９年（1724）），藤屋（享保期（1716～36）），海老屋（宝暦３年（1753））などが御茶屋として免許されたことにより，御手洗町では，港に停泊する船員に対する接客業が盛んになったとみられる。御手洗町の戸数は，明和５年（1768）には106戸に過ぎなかったが，天明３年（1783）には241戸，享和元年（1801）には302戸へと飛躍的に増加した。御手洗は，西廻り海運の活況によって，この時期に中継商業港として大きく発展したとみなすことができる。

19世紀に入ると，文政11年（1828）には広島藩が，天神の尾根と千砂子の尾根の間の海岸に護岸堤と波止を備えた町場を拡張する工事を行った

第２図　御手洗町の形成過程
（『豊町史』により作成）
注）地割の形状は，八重垣正夫氏作成の「土地利用図」をもとに加筆修正した。

（第２図参照）。これによって，御手洗では，現在へ繋がる町の形態がほぼ完成したといえる。文政13年（1830）には，千砂子波止のたもとに，大坂の豪商鴻池善右衛門らが住吉神社を勧請し，社殿を寄進した。文政12年（1829）当時，御手洗港では，北前船によってもたらされた北国米をはじめ，以下に示した多様な品目が取り引きされた[7]。

穀物　酒　あいもの　荒物　小間物　酒　塩
薪　茶　味噌　醤油　酢　油　粕　蝋燭
呉服類　木綿　綿　紙　薬種　菓子　銘酒
瀬戸物　琉球芋　桃　柿　諸茸類　金物細工
もの類　野菜類　かう類

御手洗港の機能は，遠隔地を結ぶ中継商業港としての機能にとどまらない。九州・四国の諸大名の中には，参勤交代の際に御手洗に寄港するものが多く，鹿児島・萩・中津・延岡・飫肥・小倉・福岡・宇和島・大洲などの諸藩が御手洗町に船宿を指定した。また，御手洗に港町が形成されると，寄港地としての機能に加え，周辺島嶼の村落を含む御手洗経済圏ともいうべき商圏が成立した[8]。御手洗経済圏の範囲は，手漕ぎ船によって一日で御手洗と往復できる豊島・斎島・大崎下島（以上，安芸国），岡村島・小大下島（以上，伊予国）であり，西の三之瀬（下蒲刈島），東の木江（大崎上島）の商圏と競合する規模を有していた。

２）近代における御手洗町の変容

既往研究において，御手洗港の機能が近世近代移行期において著しく低下したといわれる根拠は，以下の通りである。すなわち，近世に存在した参勤交代の際の船宿としての機能や年貢米の流通が，近代に入って消滅したことや，動力船や鉄道の出現により，それまで御手洗港を経由していた船舶の多くが，呉・竹原・尾道・今治などの諸港と直接往来することが可能になったこと[9]，さ

らには，御手洗経済圏内の村落へ商工業が導入されたことにより，御手洗経済圏内における御手洗と周辺村落との格差が縮小したことなどである。

しかしながら，御手洗港は，後述するように，売春防止法が施行される昭和33年（1958）以前には，多くの置屋や芸娼妓が存在するのみならず，港に停泊する船員を対象とした商業が盛んな町として，活況を呈していた。ここでは近代における御手洗町の変容を移出入物資や業種構成の推移を検討することを通して，近代における御手洗町の変容を跡づけてみたい。

a. 移出入物資の変化

第２表，第３表および第４表はそれぞれ，御手洗町における明治14年（1881）の移入物資と，明治40年（1907），昭和13年（1938）の移出入物資を示したものである。各年次のデータは，品目数に多寡があるものの，主要な品目は各年次ともに網羅されていることから，おおよその傾向の把握は可能であろう。

明治14年の移入物資において注目すべきは，米の占める割合が非常に高く，全体の６割[10]に及んでいることである。明治19年（1886）当時，御手洗町を構成する商店は142軒確認できるが，そのうち米雑穀商が37軒で最も多く，２位以下の旅籠屋（17軒），金物屋（13軒），酒屋（11軒）などを大きく引き離していた[11]。近世期に御手洗港の重要な取り扱い品目であった米の地位は，近代に入って，急激に低下したわけではなかったといえる。米以外の主要な移入品目としては，麦・大

第１表　港町御手洗の歴史－昭和33年（1958）以前－

年次	事項
寛文６年（1666）	広島藩が耕地を屋敷地にすることを許可したことにより，御手洗への移住が開始される。
延宝期（1673～81）	大長村から18軒の商人が移住する。
貞享２年（1685）	大崎下島外から商人が移住する。
宝永４年（1707）	九州小倉から勧請した恵比寿神社を建て替える。
正徳３年（1713）	町年寄役が設置される。
享保２年（1717）	弁天～蛭子海岸線の埋め立てを開始する。
享保９年（1724）	若胡子屋が広島藩から「御茶屋」として免許を受ける。
延享２年（1745）	船燥場（ふなたでば）を設置する。
宝暦９年（1759）	大火が発生する。この頃から春秋２回の芝居興行が行なわれる。
文化５年（1808）	庄屋が設置される。
文政９年（1826）	広島藩が富くじ興行を許可する。
文政11年（1828）	広島藩が新たに市街地の開発を計画する。
文政13年（1830）	広島藩の殖産興業政策の一環として大波止が構築される。 大坂商人・鴻池善右衛門（広島藩蔵元）らが住吉神社を寄進する。
明治６年（1873）	小学校知新館が開設される。
明治11年（1878）	郡区町村編成の際，町名の公称（大長村之内御手洗町）を固守する。
明治20年（1887）	飛地交換分合により，大長村から独立する。
明治22年（1889）	市制・町村制の施行に伴い，御手洗町となる。
大正２年（1913）	御手洗～尾道間の定期旅客線が就航する。 60余軒の商店が周辺農村からの集客を目的として「御手洗町商工会」を組織する。
大正６年（1917）	大崎電灯が開設される。
昭和３年（1928）	上水道が完成する。
昭和５年（1930）	御手洗港が内務省港湾指定並びに船舶検査施工地に指定される。
昭和15年（1940）	若胡子屋跡と七卿落遺跡が広島県史跡に指定される。
昭和31年（1956）	大長村・久友村と合併して豊町となる。
昭和33年（1958）	売春防止法の施行により，置屋業が廃業される。

（『豊町史』・『角川日本地名大辞典　広島県』および『日本歴史地名大系　広島県の地名』により作成）

豆・小豆などの穀類のほか，乾物類・酒・塩・薪・野菜類などが挙げられる。これらの品目は，御手洗町内で消費されるほか，少なからず停泊船や周辺村落の需要に充てられたものとみられる。

日露戦争直後の明治40年における移入物資の首位は米であり，明治14年とほぼ同じ6割弱を占めている。明治14年と明治40年との大きな違いは，造船用木材が米に次いで全体の2割弱を占めていることである。この造船用木材とは，「日向材」と呼ばれる宮崎県産の木材であり，御手洗港へ移入された後，主として阪神方面へ移出されていた[12]。また御手洗港では，寄港する機帆船を修繕する必要から，明治24年（1891）の丹保造船所の設立後，亀沢造船所（明治27年（1894））・能地造船所（明治40年）・木村造船所（明治43年（1910））が相次いで設立された[13]。このことから，造船用木材の一部や造船用鉄は，御手洗港における需要を充たすためのものであったとみることができる。また肥料も同様に，御手洗に隣接する大長村などでの柑橘栽培の興隆[14]と対応するものであろう。

産業革命期を経た昭和13年には，食料品や衣料品・燃料などの生活物資をはじめ，材木類や金属類に至るまで，非常に多様な品目が移入されていたことがわかる。これらの物資の移入元は，多方面にわたるが，本州側では尾道・竹原，四国側では今治から複数の品目を移入しており，とくにこれらの都市との結びつきが強いことがわかる。明治40年と比較して，注目すべき大きな変化は，移出入物資の過半数を弁甲（造船用木材）が占めるようになり，米と造船用木材との相対的な地位が逆転したことである。弁甲や丸太材などの材木類は，宮崎県や四国地方からいったん御手洗港へ移

第2表　御手洗港の移入物資
－明治14年（1881）－

品目	数量	（単位）	金額（円）
米	8,276	石	78,622.0
麦	1,650	石	9,075.0
大豆	1,320	石	8,316.0
小豆	275	石	2,145.0
味噌	680	貫	136.0
醤油	350	石	3,150.0
漬物	4,000	貫	360.0
野菜	32,400	貫	2,916.0
乾物類	16,000	貫	9,168.0
酒	585	石	7,312.5
塩	6,000	石	4,800.0
炭	17,500	貫	700.0
薪	122,380	貫	3,059.5
船釘	50	貫	37.5
艫	350	挺	1,050.0
木綿	1,200	端	0.3
苧	50	貫	37.5
船燈	30	筒	60.0
棕櫚皮	30,000	枚	105.0
合計			131,050.3

（『瀬戸内御手洗港の歴史』より転載）

第3表　御手洗港の移出入物資－明治40年（1907）－

品目	（単位）	移入		移出	
		数量	金額（円）	数量	金額（円）
米	石	35,850	537,750	34,130	522,149
裸麦	石	3,200	27,200	2,670	23,229
雑穀	石	4,800	45,600	4,600	44,620
造船用木材	才	2,450,000	183,750	2,120,000	180,200
造船用鉄	貫	9,300	4,185	5,400	2,538
肥料	貫	143,500	50,225	143,200	50,836
酒	石	1,532	61,280	1,300	55,860
木炭	貫	350,000	21,000	220,000	14,300
合計			930,990		893,732

（『瀬戸内御手洗港の歴史』より転載）

第４表　御手洗港の移出入物資－昭和13年（1938）－

品目	（単位）	移入			移出		
		数量	価格（円）	移入元	数量	金額（円）	移出先
米（国内産）	石	126	4,662	今治・豊浜			
〃（朝鮮産）	石	2,853	99,855	尾道	1,420	52,540	豊浜・大長・久比・投錨船舶
豆類	石	240	6,360	尾道	40	1,120	大長・沖友
麦類	石	245	6,365	尾道			大長・沖友
麦粉	石	510	2,703	尾道	130	715	
生魚	貫	3,380	13,710	豊浜・関前・大長・今治・吉良	600	3,900	糸崎
野菜	貫	29,439	5,410	関前・今治・大長			
和酒類	石	416	52,450	三津・阿賀・本郷・木谷	113	15,840	大長・久比・沖友・豊浜
洋酒類	打	1,375	7,123	尾道	14	64	大長・久比・沖友・豊浜
酢・醤油	石	186	5,756	波止浜・今治・竹原・小豆島・尾道	73	2,720	木江・大長・久比・沖友・豊浜
ラムネ・サイダー	打	12,490	5,103	尾道・阿賀・竹原・大西			
菓子類	斤	4,000	1,200	尾道	2,111	698	久比・沖友・豊浜・大崎南・大長
牛肉	貫	850	3,825	忠海・尾道・今治			
煙草			11,220	竹原			
織物類	反	2,000	10,437	大阪・京都	481	2,095	大長・久比・沖友・豊浜・大崎南
履物	足	2,586	2,068	大阪			
石鹸・化粧品	打	1,480	4,280	尾道	120	404	久比・沖友・豊浜・大長
紙類	千枚	3,601	7,489	今治・尾道			
薪	貫	51,000	5,100	久友・竹原			
木炭	貫	1,580	6,320	宮崎・今治			
石炭	噸	80	1,840	大崎南・若松・門司・尾道			
重油類	石	4,965	50,415	尾道	1,032	12,428	大浦・久比・沖友・豊浜・蒲刈・投錨船舶
板	坪	21,116	21,116	宮崎	18,763	22,515	大阪・神戸・四国
建具	枚	500	1,000	尾道・今治	1,300	2,860	豊浜・大長
丸太材	才	1,500,000	112,500	徳島・高知・宮崎	1,100,000	99,000	大阪・神戸
弁甲	膚	125,213	601,022	宮崎	130,000	780,000	大阪・神戸
金属類	貫	9,850	17,130	福山・大阪・尾道	920	1,840	大長・久比・沖友・豊浜
硝子	坪	1,500	1,500	広島	1,100	1,320	大長
蜜柑	貫				14,196	3,832	大長
セメント	袋	2,100	2,730	門司・尾道	350	490	沖友・大浦・大長
肥料類	貫	17,975	6,683	尾道	10,790	4,486	大長・久比・沖友・豊浜
合計			1,077,372			1,008,867	

（『瀬戸内御手洗港の歴史』より転載）

入した後，阪神方面へ移出されており，御手洗港がこの材木類と福岡県若松・門司の石炭に限って，遠隔地を結ぶ中継商業港としての機能を維持していたことがわかる。これに対して，米をはじめとする他の物資の移入元は，本州側では尾道・忠海・竹原・三津・阿賀，四国側では今治・波止浜・大西など近隣の諸港（第１図参照）に限られている。

一方，大崎下島や周辺島嶼の村落，投錨船舶に移出先が限定される物資や，専ら御手洗町内で消費されたとみられる物資が多くなったことも，この時期の特徴といえる。たとえば食料品では，酢・醤油・菓子・和酒類などを周辺村落へ移出していたことを除けば，ほとんどが御手洗町内で消費されている。また牛肉や洋酒類・ラムネ・サイダーなど，当時としてはハイカラで嗜好品的な性格が強い食料品も移入され，御手洗町内で消費されていた点が注目される。織物類や履物などの衣料品も同様に，大阪・京都方面から移入し，その大部分が御手洗町内で消費されていた。また燃料では，薪や木炭，石炭，重油類などを御手洗町へ移入していたが，重油類の一部が周辺村落や投錨船舶へ充てられていたことを除けば，その大部分が御手洗町内で消費されていた。このように御手洗港は，この時期，御手洗町内および御手洗経済圏内の村落に対する生活物資の集散機能を相対的に高めていったといえる。

以上のように，近代初頭の御手洗では，近世同様，米が主要な移出入物資であった。明治期における御手洗港の米の移出入経路は，資料的制約もあって不明であるが，近世期における北国米の場合と同様，遠隔地を結ぶものであったと推察される。また昭和期以降における米の移出入量の減少は，鉄道輸送の興隆によるところが大きいとみられる。このような状況下で，御手洗港は，鉄道輸送に適さない材木類に限定されるものの，昭和戦前期においても，遠隔地を結ぶ中継商業港としての機能や，御手洗港へ投錨した船舶へ米（朝鮮米）や重油などの物資を供給する機能を維持していたことが指摘できる。これに加えて御手洗町は，食料品や衣料品，燃料などの生活物資をはじめとする多く品目に関して，周辺村落への集散機能をもっていたことが指摘できる。

b. 業種構成の変化

第５表は，御手洗町における明治19年（1887），昭和２年（1927），昭和26年（1951），昭和36年（1961）の業種構成を示したものである。個々の資料の性格が異なるため，取り扱う業種の種類や分類が一様でないこと，必ずしも全ての店舗や工場が網羅されていないことにより，資料的制約が大きいことは否めないものの，御手洗町を構成する業種の変化について，おおよその傾向を把握することは可能であろう。

明治19年には，米穀店が37軒もあるほか，旅館（旅籠屋，17軒），鍛冶・金物店（13軒），飲食店（12軒），酒店（11軒），燃料店（10軒），装飾品・小間物店（９軒）などの業種が多い。これらの業種の多くは，港町や町場に特有の業種であり，明治前期における御手洗町の，港町としての機能や中心地としての機能の高さを示しているといえる。

昭和２年になると，米穀店が７軒に激減したほか，旅館（10軒），燃料店（３軒），装飾品・小間物店（３軒），鍛冶・金物（８軒）などの減少が目立っている。とくに米穀店の減少は，御手洗港の移出入物資における米の地位が，明治末から昭和戦前期にかけて著しく低下した事実と対応するものである。その一方で，港に停泊する船員を対象とした各種サービス業として，置屋（14軒），ちょろ押し[15]（９軒）のほか，飲食店（13軒）や酒店（12軒），菓子店（10軒）なども微増している。このほかにも，鍛冶・金物店（８軒），書籍・文具店（２軒），畳店（１軒）など，御手洗が古くからの中心地であったことを示唆する業種が確認できる。また，銀行や医院，写真館など，近代化を象徴する業種や，造船業（４軒）や船具店（６軒）などの業種も新たに加わっている。このことから，昭和２年当時の御手洗町は，米穀流通などの商業の衰退こそ顕著であるが，寄港する船舶への

第５表　近代における御手洗町の業種構成の変化

	明治19年	昭和２年	昭和26年	昭和36年
旅館	17	10	2	1
置屋	−	14	14	0
ちょろ押し	−	9	8	−
飲食店	12	13	8	7
食料品　米穀	37	7	−	1
〃　酒	11	12	3	4
〃　菓子	8	10	7	7
〃　醤油	7	1	1	1
〃　青果	−	2		4
〃　乾物	−	7		−
〃　豆腐	−	4	6	1
〃　肉	−	2		1
〃　魚	−	1		0
〃　その他	4	2	1	2
煙草	−	−	−	2
雑貨	−	8	5	12
薬	1	4	2	1
衣料品　衣服	−	4	3	3
〃　履物	−	2	1	0
裁縫修理	−	−	5	−
装飾品・小間物	9	3	2	1
書籍・文具	3	2	1	2
古道具	3	−	−	−
風呂	−	1	2	1
理髪・美容	−	3	4	3
映画館	−	−	1	−
医院	−	3	4	−
療術業	−	3	2	−
助産婦	−	1	1	−
畳	−	1	−	1
染物業	−	2	1	1
写真業	−	1	1	−
燃料	10	3	2	3
飲料水(水道)	−	1	1	2
電気製品	−	1	1	2
造船業	−	4	5	4
船具	−	6	3	1
材木	5	6	1	4
鍛冶・金物	13	8	4	5
回漕業	−	4	4	1
建具	−	−	4	2
建築土木	−	−	4	4
銀行	−	1	1	1
質屋・金融	1	−	1	−
その他	−	13	5	1
合計	141	179	121	86

(『瀬戸内御手洗港の歴史』・豊町役場資料・八重垣正夫氏作成の「土地利用図」および聞き取りにより作成)

接客業の活況や，周辺村落に対する中心性は，依然として高い水準にあったことが指摘できる。

第二次世界大戦後の昭和26年には，旅館（２軒）や飲食店（８軒），酒店（３軒）などがさらに減少している。これは，第二次世界大戦前後の混乱によるところも少なくないとみられるが，御手洗町が，廻船寄港地や周辺村落にとっての中心地としての機能を，次第に低下させつつあったことを示しているといえる。昭和36年には，昭和33年(1958）の売春防止法の施行を受け，それまで14軒あった置屋が全て廃業になっている。また，置屋や芸娼妓と関わりが深いとみられる，飲食店（７軒），衣料品店（３軒），装飾品・小間物店（１軒）などの業種も，昭和２年と比較して，皆無または著しく減少していることがわかる。その一方で，従来と同程度に存続もしくは微増している業種は，各種食料品店（20軒）や雑貨店（12軒），理髪・美容店（３軒）など，住民に生活必需品やサービスを提供するものに限られている。このことから，売春防止法が施行された昭和33年以降の御手洗町では，地域内での中心地としての機能のみが残存したといえる。

Ⅲ　御手洗町の空間構造

１）町の構成

第３図は，『瀬戸内御手洗港の歴史』に記載された，近世の町界，昭和初頭以降の区班界と，『豊町史』に記載された大正７年（1918）当時の町区界をもとに，御手洗町を構成する町の変遷を示したものである。

近世の御手洗町は，一番町から十番町の10町から構成されていた。このうち，一番町から五番町は，弁天の尾根から天神の尾根にかけて分布しており，17世紀末から18世紀初頭にかけて，御手洗に初期的な集落が形成された地区とほぼ一致していることがわかる（第２図参照)。このうちとくに二番町から四番町は，自然の地形を利用して山際に町が形成されたことを反映し，街路や屋敷割りも概して不規則といえる。またこの地区の天満

第3図　御手洗町を構成する区班の変遷
(『瀬戸内御手洗港の歴史』および『豊町史』により作成)

宮は，菅原道真が太宰府へ左遷される際，ここへ上陸し，錫で地面を掘ったところ，清水が湧き出たという，「御手洗」の地名の由来ともなった伝承を有し，宝暦5年（1755）に天神社として創建された神社である。天神社は，近世においても，水質の良好な本川の井戸があったといわれており[16]，このことも，港町形成の初期において，当地区に集落が立地するための好適な条件であったとみられる。

これに対して六番町から十番町は，主として18世紀中期以降に，埋立て地に町立てされた地区であり，五番町に南接する山際が六番町，埋立てによって成立した海岸部には，南側から順に七番町から十番町が配置されている。とくに七番町から十番町は，埋立て地であることを反映して低平であり，規則的な街路網と屋敷割りがなされている。このうち八番町から十番町は，主に18世紀以降，かつての二番町から四番町に替わって，港町の商業中心となった地区であり，古くからの商家の屋敷構えが残る地区でもある[17]。これに対して七番町は，19世紀初頭の埋立てと千砂子波止の築造以降，急速に置屋や船宿が建ち並び，歓楽街として発展した。

近世に成立した一番町から十番町の番町組織は，近代に至っても，御手洗町における全町的な議案が，各町から選出された組長の合議によって議決されるなど，御手洗町の実質的な自治組織として有効に機能した[18]。この番町組織は，大正7年に町区制に改正された[19]ものの，従前の番町をほぼ踏襲し，一番町が弁天町，二番町が上町，三・四番町が天神町，五番町が榎町，六番町が富永町，七番町が住吉町，八番町が蛭町，九番町が

相生町，十番町が常盤町の９町区にそれぞれ改められた。さらに昭和に入って，この町区は，それぞれ３班からなる天神・蛭子・住吉の３区に再編成された。

２）昭和20年代以前における御手洗町の景観

第４図は，八重垣正夫氏が作成した昭和２年（1927）頃における御手洗町の「土地利用図」である。本節では，第４図をもとに港町御手洗が活況を呈していた第二次世界大戦以前における景観について，各業種の立地と分布に留意しながら復原していくこととする。

a. 行政・金融・医療機関

御手洗町には，町役場や町立の尋常高等小学校に加え，裁判所出張所や警察署派出所，郵便局などの種々の行政機関が立地している。また芸備銀行の支店や大崎銀行などの金融機関も立地しており，地域内において高い中心性を有していたことがわかる。これらの機関の多くは，18世紀以降，御手洗町の商業中心となった，蛭子区第２班，蛭子区第３班，天神区第１班に立地している。

医院が３軒（うち１軒は歯科医）あることも，町ならではの特徴であるといえる。また，医院での施術に代替，補完する業種として，薬店が４軒あるほか，按摩や骨接ぎなどの療術業，産婆などの存在も確認できる。医療機関とその関連業の集中は，御手洗周辺の住民や船員の健康状況はもとより，花街が抱えていたとみられる花柳病の問題を考えるうえでも重要な点であるといえる。

b. 接客業

昭和２年当時の御手洗町には，旅館（船宿）が10軒，置屋が14軒，料理屋が13軒あり，接客業が非常に盛んな町であったといえる。船宿では，沖になじみの船が見えると，風呂を沸かし，主人が伝馬船に乗って，沖の船を出迎えにいったという[20]。船乗りたちは，宿に到着すると茶湯の接待を受けた後，風呂に入り，酒宴に興じた。船宿は，主として御手洗港に船を停泊させた船員の宿泊のために利用されたが，船員の中には「ベッピン[21]」と呼ばれる芸娼妓を伴い，船宿や旅館で一夜を共にすることも少なくなかったといわれる。置屋は，こうした芸娼妓たちの居住の場であったが，芸娼妓たちは，置屋から旅館や料理屋へ出張したり，おちょろ船に乗って沖に出たりするだけでなく，置屋へ客を引き入れる場合もあったという。

これらの業種は，とくに千砂子波止に近い築地通り沿いに集中して立地しおり，ここが歓楽街であったことが一目瞭然である。第二次世界大戦以前の築地通りでは，夜更けでも灯りが消えた家は一軒もなく，船宿では大戸をおろすことがなかったとされる[22]。

飲食店としては，料理屋や仕出し屋，食堂，カフェーなどの存在が確認できる。これらの飲食店は，旅館や置屋の集中する築地通りから蛭子区第１班，蛭子区第２班にかけて分布している。そのほか娯楽施設としては，第４図が作成された昭和２年当時には，撞球（ビリヤード）場が２軒確認できるのみであるが，それから４年後の昭和６年（1931）頃には，蛭子区第２班のまる六造船場[23]の跡地に，映写機を据えた小屋が建ち，無声映画や芝居が上演され，さらに昭和12年（1937）には，ここに西洋建築の常設映画館「乙女座」が建設された。

c. 買い回り品店

買い回り品店に関しても，呉服・洋品などを取り扱う衣料品店や履物店，化粧品店や小間物店，家具店，畳店，時計店，書店，文具店，写真店，洗張店など，非常に多様な業種が，蛭子区から天神区第１班，天神区第２班にかけて集中していた。このうち蛭子区第３班の昌文堂書店は，もとは酒・醤油の小売りをする家であったが，明治42年（1909）に書籍と新聞の販売を開始し，大崎下島唯一の書店として，第二次世界大戦以前の大崎下島・大崎上島への教科書販売を一手に担っていた[24]。また天神区第２班の加藤呉服店は，第二次世界大戦前から終戦後にかけて，呉服の仕入れや

第４図　昭和戦前期における御手洗町の土地利用
（八重垣正夫氏作成の「土地利用図」および聞き取りにより作成）

反物への紋入れを，京都の問屋に直接発注していた[25]。同店では芸娼妓たちが重要な顧客であり，置屋の主人は，新しい芸娼妓が入ると，必ず連れ立って同店へ挨拶におとずれ，着物を注文する際には，置屋の主人が芸娼妓の体型を店員に伝えて，生地を選んだという。天神区第1班の大瀬戸小間物店は，昭和2年頃営業を停止したが，明治末から大正期に作成された引き札（第5図）が残っており，その描写内容から，同店では香水や白粉・櫛・簪・扇子・ポーチなどを取り扱っていたことが推察される。大瀬戸小間物店では，これらの商品を主に大阪から仕入れていたという[26]。

多様な買い回り品店の存在は，御手洗町の繁栄ぶりとともに，周辺地域内における御手洗町の中心性の高さを示しているといえる。

d. 最寄り品店

昭和2年頃の御手洗町には，各種の食料品店が39軒，雑貨店が7軒確認できる。とりわけ食料品店は，御手洗町の人口規模からして非常に多いといえるが，その理由としては，後述するように，これらの店舗が，御手洗町の住民が日常消費する食品だけでなく，投錨船舶への供給や飲食店で使用する食材も取り扱っていたためであると考えられる。食料品店や雑貨店は，築地通り沿いの繁華街にも一部みられるが，大部分は蛭子区第2班，蛭子区第3班，天神区第1班，天神区第2班にかけて集中している。

第5図　大瀬戸小間物店の引き札
（大瀬戸　時氏提供）

e. 製造業

御手洗町には，上記の各種商店に加え，製造業者も少なからず存在していた（第6図）。これらのうち，鍛冶・金物店や家具店，畳店，染物店，篭店，あるいはうどんやかまぼこ，菓子など，食品の製造・販売を兼ねた業種が，町の中に，各種商店とともに散見される。一方，町の南北両端を中心に，比較的広い敷地をもつ工場が，いくつか立地している。これらの工場の内訳は，造船場が4軒と最も多く，ほかは瓦・機械・電気が1軒ずつである。造船場では，農船やおちょろ船などの小型船を主に製造するほか，御手洗に寄港する船の修理や船底の補修なども行っていた。また造船の材料を取り扱う材木店や，櫓をはじめとする各種船具店，船大工などの存在も複数確認できる。

実際，大正期から昭和初頭において，御手洗町では工産物の生産額が，農産・水産物の生産額をはるかに上回り，しかも工産物の比重が増加していた（第7図）。当時の商業収益額の推移が判然としないため，断言はできないが，御手洗港では，中継商業港としての機能を低下させる中で，造船業をはじめとする工業に，新たな活路を見出そうとしていた状況が読み取れる。

上記の業種以外にも，港町に特徴的な施設や業種として，蛭子区第2班に集中して立地する倉庫のほか石油店・水船・銭湯などが挙げられる。また，回漕業や仲背などの運送業・船員などが多いことも港町ならではの特徴といえる。

以上の分析から，御手洗町は，ごく大まかにいえば，行政・金融・医療機関などが集中している蛭子区，買い回り品，最寄り品などの小売店が集中する天神区，置屋や飲食店などが集中する住吉区，その外縁部に立地する近代以降に開発された工業地区などによって構成されていたといえる。

このうち天神区と蛭子区は，御手洗町の中では，本通りを擁し，18世紀中期以前に開発された歴史の比較的古い地区であり，御手洗町や周辺地域の住民にとっての町場としての性格が強いといえる。

第６図　昭和戦前期における御手洗町の工業
（八重垣正夫氏作成の「土地利用図」および聞き取りをもとに作成）

第７図　御手洗町における部門別生産額の推移
－大正８～昭和５（1919～30）－

これに対して住吉区は，19世紀以降に新しく開発され，歓楽街を形成していた。住吉区は，千砂子波止に隣接していることもあって，港に停泊する旅客を対象とする接客業が盛んな，いわば旅客にとっての町場ということができる。しかしながら，御手洗町における歓楽街は，廓が存在していないことからもわかるように，地域住民の生活空間と明確に区分されていたわけではない。また，加藤晴美[27]の指摘からも明らかなように，商店や施設といった町の各種機能に関しても，地域住民と芸娼妓，旅客とが同一の商店や施設を相互に利用していた。さらに大崎下島内の若い男性が芸娼妓と懇意にしたり，芸娼妓が地域住民の一員として町の祭礼や運動会へ参加したりした事実からもわかるように，地域住民と芸娼妓は一定の人的な交流さえ持つ関係であった。このように地域住民と芸娼妓の生活空間が，相互に隔絶されたものではなく，両者が多くの接点を持ちつつ，存立していた点に御手洗町の特徴の一つを見出すことができる。

３）昭和30年代以降における景観の変化

第８図は，平成10年（1998）における御手洗町の土地利用を示したものである。昭和20年代と比較して，町役場[28]や裁判所出張所などの行政機関や銀行の支店といった金融機関がなくなり，中心地としての機能が著しく低下した状況が読み取れる。また，かつて多様な業種が軒を連ねてひしめき合っていた御手洗町において，平成10年まで営業を続けている商店はまばらで，仕舞屋や空家が目立っている[29]。かつて御手洗町を代表する業種であった接客業は，昭和２年と比較して，置屋が皆無となっただけでなく，旅館（１軒）や飲食店（３軒）などの減少も著しい（第４図参照）。平成10年まで営業を続けている商店の中には，電気店（２軒）や時計店，化粧品店，書店，畳店，表具店（各１軒）などの買い回り品店が若干含まれるものの，約半数は，食料品・雑貨店（18軒）であり，概して御手洗町内や周辺村落の住民の，最寄り品需要に応じる業種が存続しているとみられる。

御手洗町の商業が衰退した要因としては，売春防止法の施行により，芸娼妓と関わりの深い業種が衰退したこと以外に，大崎下島と愛媛県今治市とを結ぶ渡海船の出現が挙げられる。御手洗町の住民は，この渡海船を利用して，今治へ買い物に出かけたり，買い物の代行を依頼したりすることによって，種々の生活用品を入手するようになった[30]。また平成８年（1996）頃からは，毎週金曜日の夜に，今治から生鮮食品を積んだフェリーが御手洗へ寄港して市場を開き，その後２日間かけて，大崎下島内の村落を巡るという。御手洗町は，近年では，今治の商圏に編入されているといえる。

御手洗町では，平成10年当時，商業が停滞し，中心地としての機能が低下する一方で，観光・社会教育の充実を企図した施設の存在が目立つ。町役場と小学校の跡地は，それぞれ多目的研修センター，ふるさと学園として再利用されている。また近世のなごりを留める史跡として，三条実美ら尊王攘夷派の公家が，京都から長州へ向かう際に立ち寄ったとされる七卿落遺跡や，御手洗町で唯一現存する御茶屋の遺構である，若胡子屋跡などの存在が確認できる。さらにこれと前後して，平成６年（1994）の重要伝統的建造物群保存地区への選定以降は，町並みの保全・修景が行われたほ

第8図　平成10年（1998）における御手洗町の土地利用
（「ゼンリン住宅地図　広島県豊田郡－西部－（1998年版）」により作成）

か，平成14年（2002）３月には乙女座が，江戸みなとまち展示館・乙女座として復元されるなど，御手洗町は，近世から昭和戦前期にかけての風情を留める観光地として，新たな活路を見出しつつある。

Ⅳ　食料品店主の眼を通してみた昭和20年代以前の御手洗町商家の暮らし
ーろ市商店主・小草綾江さんの「食」の記憶を手掛かりにー

１）御手洗町の食料品店とその取り扱い品目

御手洗町には，第一次産業に従事する人は非常に少なく，多くの住民は，何らかの形で食料品を購入せざるを得ない状況にあった。また御手洗町には，現在に至るまで大型スーパーなどの量販店が存在したことはないため，食料品店は，行商とともに，住民の食生活を支えるうえで重要な役割を占め続けている。さらに御手洗町が廻船寄港地として繁栄し，カフェーや食堂などの飲食店が数多く存在していた昭和20年代以前において，食料品店は，船舶や飲食店へ食材を供給する役割をも有していたことは先述したとおりである。

実際御手洗町には，昭和２年（1927）において，48軒もの食料品店が存在しており，その店舗数は，御手洗町の人口規模に対して非常に多かったといえる（第５表参照）[31]。第９図は，昭和初期の御手洗町における食料品店・雑貨店・薬局の分布を示したものである。食料品店のうち，酒類を取り扱う店舗が12軒と最も多く，菓子店が10軒，米穀店と乾物店が各７軒でこれに次いでいる。このほかには豆腐店が４軒，牛肉店と青果が各２軒，醤油店・鮮魚店・かまぼこ店・パン店が各１軒ずつある。このうち酒店や米穀店が多い理由としては，御手洗港に停泊する船員への供給に加え，御手洗町経済圏内の周辺村落へも供給していたためであると考えられる。店舗数が少ないとはいえ，牛肉店やパン店が存在する点も町ならではの特徴であり，このことは御手洗町で，外来の食文化をが比較的早くから受容されていたことを示唆している。これに対して，町の規模から考えて青果店や鮮魚店は少ないといえるが，それは，これらの品目が行商など，常設店以外での流通に大きく依存していたことによるとみられる。

複数の品目を取り扱っている店舗が，第９図からだけでも15軒確認できる。具体的には，米穀と酒類を取り扱っている店舗が４軒あるほか，酒類と乾物，青果と菓子，青果と乾物などの組み合わせなどである。また，酒類と雑貨，菓子と薬など食料品と食料品以外のものとの組み合わせも確認できる。このように複数の品目を取り扱う小規模で万屋的性格の食料品店が多数存在している点に御手洗町の住民生活とも密接な関わりを持っていた食料品店の特徴を見出すことができる。

しかしながら，１つの店舗で複数の品目を取り扱いっていた実態については，上述の土地利用図の記載からだけでは十分に明らかにしたとはいえない。店舗によっては，さらに多品目の商品を取り扱っていたことは想像に難くないからである。各店舗での取り扱い品目や具体的な種類・販売ルートなどに言及することが，住民の生活実態をより具体的に記述する上でも必要であると考えられる。

そこで以下では，食料品全般を取り扱う「ろ市商店[32]」を事例として御手洗町における食料品店と住民の食生活との関わりについて具体的に検討してみたい。具体的には，ろ市商店の現在の店主である小草綾江さんからの聞き取りをもとに，昭和20～30年代を中心として，御手洗町の食料品店や食生活の復原を行なう。綾江さんは，父の勤務先であるアメリカ合衆国のシアトルで大正11年（1922）に生まれ，幼少期をシアトルで過ごした。昭和８年（1933），綾江さんが11歳の時，母の病気を契機に日本へ帰国し，父の故郷である大崎下島の久比村（第10図）で暮らした。久比村は，大長村など大崎下島の他の村落と同様，海に向かって刻まれた谷に集落が立地し，概して稲作よりも畑作が卓越する村落であった。綾江さんは，昭和18年（1943）頃に小草家に嫁入りすると同時に，家業であるろ市商店の仕事を手伝い始めた。

第９図　昭和戦前期における御手洗町の食料品店・雑貨店・薬局の分布
（八重垣正夫氏作成の「土地利用図」および聞き取りをもとに作成）

第10図　大崎下島の土地利用－明治31年（1898）頃－
（正式二万分一地形図「御手洗」（明治31年測図）により作成）

2）ろ市商店の取引品目と仕入先

第６表は，昭和30年代におけるろ市商店の取り扱い品目とその仕入先を示したものである。これによれば，ろ市商店では当時，青果物（望月商店），乾物（日吉屋），パン・惣菜（蔵金今治青果），天ぷら[33]（田中屋本店），塩干物（菅友市商店），精肉（小林商店）の６つの業者からそれぞれ商品を仕入れていた。これらの業者のうち，小林商店とは平成10年（1998）頃に取引をやめたが，それ以外の業者とは，現在まで取引を続けている。これらの業者の所在地は，全て愛媛県今治市であり，御手洗の食料品の仕入先として，愛媛県側との結びつきの強さが指摘できる。

取り扱い品目は，望月商店からは，野菜・果物以外に，冬季には生のうどんやそばなどを仕入れていた。また，蔵金今治青果からは，食パン・乾パン・豆腐・油揚げ・トンカツやコロッケ（ともに油で揚げたもの）などを仕入れていた。菅友市商店からは，昭和30年代には，イワシなどの魚類の干物のみであったが，昭和50年代半ば頃からもずく・うなぎ・たらこ・ししゃもなど，それ以前には御手洗であまり消費されることのなかった魚介類やギョウザ・玉子豆腐などの惣菜を仕入れるようになった。また近年になってからは，少量ずつではあるが，キムチなども仕入れるようになったという。聞き取りを行なった平成15年（2003）７月には，これらの品目以外も，菓子パンやプリン・ヨーグルト・ジュース・缶詰などが店頭に並んでいることが確認された。

このように非常に多様な食品を取り扱っているろ市商店において，取り扱っていなかった商品としては，鮮魚や牛乳があげられる。鮮魚は，先述の通り，渡海船によって行商から直接購入する場合が多かった。また牛乳はろ市商店の近所にある

第６表　ろ市商店における取扱品目とその仕入先

取扱品目		仕入業者	
種別	商品内容	店名	所在地
青果物	野菜・果物（冬季のみ生のうどん・そば）	望月商店（カネヤ）	今治市天保山町
乾物	わかめ・かんぴょう・のり・しいたけ・高野豆腐・乾麺（うどん・そば）	日吉屋・中浜屋	今治市中浜屋
パン・惣菜	豆腐・油揚げ・食パン・乾パン・トンカツ・コロッケ	蔵金今治青果	不明
天ぷら	練製品	田中屋本家	今治市常盤町
生鮮・塩干	もずく・うなぎ・たらこ・ししゃも・さけ・ギョウザ・キムチ・玉子豆腐	菅友市商店（カントモ）	今治市天保山町
精肉	牛肉・豚肉・鶏肉・鯨肉	小林商店	不明

（聞き取りにより作成）

「おかしや」（藤田家）が各家へ配達をしていたという。

３）周辺農村との比較からみた御手洗町商家の食生活の特徴

a. 食生活

第７表は，小草綾江さんが御手洗町へ嫁入りした当時食べていた食事と，嫁入り直前まで久比村で食べていた食事を示したものである。前者は大崎下島における町の商家の食事，後者は農村の農家の食事であるとみなすことができる。

御手洗町における日常の食事では，麦ご飯（麦を混ぜた米の飯）を主食としていた。米と麦の混合比は７：３であり，御手洗では３食ともこれを食べた。御手洗町の商家において，主食が麦ご飯から米ぎり（白米だけ）の飯へと変化したのは，昭和35年（1960）頃であった。味噌汁は朝夕の２食，漬物（主にウリの粕漬け）は３食に供されるのが普通であった。おかずは，朝食には，味噌に砂糖・イリコ・ジャコ・エビなどの魚介類の乾物を炒りつけた，ひしお味噌を麦ご飯に付けて食べる程度であったが，昼食にはかまぼこや野菜類の煮物を，また夕食にはイワシのみりん干しなどの魚の干物を食べた。夕食には，７～10日に１回の頻度で，魚の干物のかわりに刺身を食べた。また朝食の際には，お茶を飲む習慣があった。

一方，久比村における日常の食生活における主食は，御手洗町同様，麦ご飯であったが，米と麦

第７表　御手洗町と久比村の食事の比較
－昭和10年（1935）頃－

	御手洗町（商家）	久比村（農家）
朝食	麦ご飯（米７：麦３） 味噌汁 ひしお味噌 漬物 お茶	いもじゃ（イモおじや）
昼食	麦ご飯（米７：麦３） 野菜の煮物 かまぼこ 漬物（粕漬け）	麦ご飯（米５：麦５） 漬物（らっきょう，梅干し，沢庵）
夕食	麦ご飯（米７：麦３） 味噌汁 魚の干物または 刺身（７～10日に１回） 漬物（粕漬け）	麦ご飯（米５：麦５） 味噌汁（具だくさん）または 煮物（野菜と豆腐，油揚げ） 漬物（らっきょう，梅干し，沢庵）
雑煮	醤油仕立ての汁 アナゴ（白焼き） かまぼこ ダイコン ミズナ	味噌仕立ての汁 油揚げ ダイコン いりこ

（聞き取りにより作成）

との混合比は５：５であり，御手洗町に比べて，麦の混入率が高かった。久比村では，この麦の混入率の高い麦ご飯を食べるのは，多くとも昼夕の１日２食あった。朝食にはたいてい「いもじゃ」と呼ばれる，サツマイモを混入した糧飯を食べ，米麦が不足している時には，昼食や夕食にもこの「いもじゃ」を食べた。漬物は昼夕の２食（主にらっきょう・梅干し・沢庵）が供された。夕食にのみ，具が多く入った味噌汁が加わったが，煮物

などのおかずがある場合には，味噌汁は供されなかったという。

また，正月の雑煮も御手洗町では，醤油仕立ての汁にかまぼこ・アナゴの白焼き・ダイコン・ミズナを加えるのに対して，久比村では，味噌仕立ての汁に油揚げ・ダイコン・イリコを加えるのみであった。ミズナはスジナとも呼ばれ，御手洗町では正月の雑煮に入れるために，年末にのみ京阪地方から移入されたものが出回った。

b. 野菜類とその利用

御手洗町において消費されていた野菜類[34]は，根菜類ではダイコン・ニンジン・ゴボウ・レンコン，果菜類ではウリ・キュウリ・ナス・ナンキン（カボチャ），葉菜類ではネギ・ハクサイ・サントウサイ・シャクシナ・スジナ（ミズナ）・ホウレンソウ・フダンソウ，イモ類ではイモ（サツマイモ）・コイモ（サトイモ）・ジャガイモなどであった（第８表）。御手洗町の商家では，これらの野菜類は主として食料品店や行商から購入していた。

ニンジン・ゴボウ・レンコンなどの根菜類やコイモ・ナンキンなどは，主として煮物に調理した。ハクサイ・シャクシナ・サントウサイは煮物や漬物に，ホウレンソウ・フダンソウは煮物やお浸しに調理した。ウリ・ナス・キュウリなどの果菜類は，主として漬物に調理した。

大崎下島においてサツマイモは，単に「イモ」と呼ばれていることからもわかるように，主穀類を代替するイモ類の中でも，主要な位置を占めていた。久比村では，昭和10年代には，秋に収穫したサツマイモを座敷の下の「イモツブ」と呼ばれる穴ぐらに貯蔵し，翌年の５月頃まで糧として利用した。これに対して，当時御手洗町では，サツマイモは蒸して間食に利用したり，おかずとして煮物にしたりする程度であった。御手洗町におけ

第８表　御手洗町の商家で消費される野菜類とその料理法

名称	出回り時期	調理法			備考
		漬物	煮物	その他	
ダイコン	冬	○			漬け物（沢庵漬）を購入
ニンジン	初夏～夏		○		
ゴボウ	初夏～夏		○		
レンコン	夏～秋		○		
ウリ	夏	○			漬け物（奈良漬）を購入
キュウリ	夏	○	○		
ナス	夏	○	○		
ナンキン（カボチャ）	夏		○		
トマト				○付け合わせ	
ネギ			○	○薬味	
ハクサイ	冬	○	○		
サントウサイ	冬	○	○		久比村では存在せず
シャクシナ	冬	○	○		
スジナ（ミズナ）	冬			○雑煮	年末にのみ出回る
ホウレンソウ	冬		○	○お浸し	
フダンソウ	冬		○	○お浸し	久比村では存在せず
タマナ（キャベツ）	初夏～夏			○付け合わせ	
タマネギ				○カレーライス	
イモ（サツマイモ）	秋～初夏		○	○吹かしイモ	主に間食とする
コイモ（サトイモ）			○		
ジャガイモ	夏		○	○カレーライス	

（聞き取りにより作成）

るサツマイモの重要性は，周辺村落と比較して相対的に低いものであったことがわかる。

御手洗町で消費されていた上記の野菜類のうち，先述した雑煮用のスジナのほかサントウサイやフダンソウなどは，綾江さんが御手洗町へ嫁入りする以前，久比村では食べられていなかった。ハクサイは当時すでに久比村でも栽培されていたが，結球が不十分なものしか収穫できなかった。これに対して，御手洗町に出回っていたハクサイは，今治方面から移入された完全に結球したハクサイであったという。

久比村では，ダイコンとハクサイが冬季の漬物原料として重要な位置を占めていた。ダイコンは11月に収穫して干した後，糠と塩で漬けて沢庵に加工し，5月頃まで食べた。ハクサイも糠と塩にトウガラシを加えて漬け，沢庵と同様，4～5月頃まで食べた。夏季にはキュウリやナスを塩で漬けて食べた。これに対して御手洗町では，冬季には沢庵，夏季にはウリの粕漬けを食料品小売店から購入して食べた。ろ市商店では，昭和50年(1975) 頃まで今治方面からウリと酒粕を購入し，粕漬けに加工して，販売した。

c. 魚類とその利用

御手洗町で消費されていた魚類は，大崎下島沿岸で獲れるタイ・アナゴ・タチ（タチウオ）・ノウクリ[35]・タコ・エビ・ジャコ（雑魚類）・ワカメなどと，今治方面から移入されるイワシ・アジ・サバなどの青魚，呉方面から移入されるアサリやカキなどの貝類などがあった（第9表）。

大崎下島沿岸で獲れる魚類のうち，タイやアナゴ・エビは日常の食事でも時々供されたが，正月や夏祭りといったハレの日のご馳走として供されることが多かった。タイは刺身や塩焼きに，アナゴは夏祭りにはタレ焼き，正月には雑煮の具として白焼きに，エビは夏祭りには天ぷらや塩焼き，日常の食事では主として塩ゆでに調理された。これらの魚類に対してタチやノウクリ・タコ・ジャコ・ワカメなどは，比較的安価で，日常的に利用される頻度も高かった。タチは専ら塩焼きにし，ノウクリは細切りにしたものを数秒ほど茹でた後，酢味噌で和えて食べた。タコは，夏季にタコ漁を専門に行う漁師が，御手洗町と大長村に3軒ほど存在していた。御手洗町の商家では，タコを漁師に注文して自宅まで届けてもらい，生で刺身

第9表　御手洗町で消費される魚類とその料理法

名称	調理法					備考
	焼き物	煮物	和え物	刺身	その他	
タイ	○			○		
アナゴ	○					夏祭り：タレ焼き，正月の雑煮：白焼き
タチ（タチウオ）	○					
ノウクリ（サメ）			○			茹でてから酢味噌和えにする
イワシ	○	○				
サバ	○	○				
アジ	○	○		○		
ジャコ（雑魚）類	○	○			○味噌汁	
タコ			○	○	○天ぷら	茹でてから天ぷら，酢の物，酢味噌和えにする
エビ	○				○天ぷら・塩ゆで	夏祭り：塩ゆで
アサリ					○味噌汁	
カキ			○			
ワカメ			○		○	水でもどして使用する。久比村では食べる習慣がなかった。

（聞き取りにより作成）

にするほか，茹でてから天ぷらや酢の物，酢味噌和えに調理して食べた。タコは，大崎下島内で消費されるほか，竹原へ出荷する場合もあったという。ジャコは，タコとともに漁師がリヤカーで売りに来たものを購入した。ジャコは下調理に手間を要したが，御手洗町の商家ではこの味を好むものが多く，焼いたり煮たり，味噌汁のだしとして利用した。ワカメも御手洗町と大長村の漁師が採集して，乾燥したもの販売していた。各商家では乾燥したワカメを購入し，水でもどしてから味噌汁や酢の物に調理して食べた。

今治方面から移入されたイワシ・アジ・サバなどの青魚類は，主として炊いたり煮たりして食べたが，アジは新鮮な場合には刺身にもした。これらの青魚類は，大崎下島沿岸で獲れる魚類に比べ，御手洗町に量的に多く出回っており，日常の食事でも食べられる頻度が高かった。しかし，御手洗の商家では，大崎下島の沿岸で獲れた魚類を「地の魚」と呼び，好んで購入して食べた。大崎下島沿岸には，御手洗の住民が「味が良い」と感じ，好んで食べる魚類が多く存在すると考えられるにもかかわらず，自ら漁業を行うものが少なく，味の上で劣ると感じられる魚類を他地域から移入して消費していたことになる。このことは，大長の住民が，周辺村落と同様の環境に生活しながら，漁業ではなく農業（柑橘栽培）を選択している[36]こととも共通する興味深い行動である。

久比村における魚類の利用に関しては，先述したように，日常の食事が野菜類を主体として構成されており，イリコや干物などに限定されていた。綾江さんが久比村に住んでいた頃には，ワカメを食べたことがなかったという。

d. 洋食と西洋野菜の普及

御手洗町には，昭和初期において多くの飲食店が存在していた。飲食店の中には，ハイカラなカフェーも含まれていた。昭和20年代後半になると，カフェーや食堂から時々，ろ市商店へ，「トマトはないか」という注文が来るようになったという。これは，トマトをトンカツ・鶏や魚のフライなどの付け合せとして利用するためであり，このことをきっかけにして，ろ市商店ではトマトを取り扱うようになった。幼少期をシアトルで過ごした綾江さんは，幼い頃からトマトを生のままパンに挟んで食べていた経験もあったため，トマトに対する抵抗感はなかったが，綾江さんの夫や舅姑はトマトを嫌い，決して食べることはなかった。また，御手洗町の住民たちも，トマトを購入する際には，熟れたものよりも，やや青いものを好んで買っていったという。

キャベツは，第二次世界大戦前には御手洗町では，「玉菜（タマナ）」と呼ばれ，わずかに流通するのみであった。しかし昭和20年代後半になると，トマトと同様にカフェーや食堂で付け合せ（せん切りキャベツ）として利用されはじめ，ろ市商店でも販売するようになった。しかしキャベツの販売を開始した当時は，御手洗町の住民がキャベツを野菜炒めや煮物，漬物などに調理して食べる習慣はなく，老人などは，ほとんどキャベツを食べなかったという。そのためろ市商店では，キャベツが売れ残ることが多かったそうである。

タマネギは，ジャガイモとともに，第二次世界大戦後には，カレーの普及に伴って需要が増加した。綾江さんは，昭和20～30年代には，子どもたちのためによくカレーを作ったそうであるが，当時牛肉は高価で入手が困難であったため，その代用として，安価な鯨肉を使用したという。小草家においてカレーは，子供たちのために頻繁に作られたが，綾江さんの舅姑はカレーを好まなかったため，綾江さんは夕食にカレーを作る時には，必ず舅姑用にナッパ（菜類）や大根の煮物を用意した。

このように，御手洗町ではカフェーや食堂などの飲食店で洋食が導入されはじめたことを契機として，食料品店がその材料となる西洋野菜を取り扱うようになった。御手洗町の住民は，食料品店で西洋野菜などの新しい食材と接触したことを契機に，新しい食材を受容するようになった。このことは，新しい食材が地域社会に受容されていく

過程において食料品店が一定の役割を果たしていたことを示しているといえる。

御手洗町の商家の食生活は，周辺農村の食生活と比較して，①主食である麦ご飯の米の混入率が高く，これを３食ともに食べること，②味噌汁を食べる回数が多いこと，③おかずの品数が多く，魚の利用も多いこと，④おかずの主要な構成要素である野菜類や魚類の種類が多いこと，⑤朝食の時に茶を飲用すること，などの特徴を指摘することができる。綾江さんに聞き取りを行なった際，綾江さんが嫁入りした際に感じた御手洗町の食生活について，「ここら（御手洗）の人は口が奢っとったけん，ごっつお（ご馳走）をよう食べとった。またここらの人は食べること（調理法）もよう知っとった。私は田舎もんでわけが分からんけん，みんな（近所の同世代の嫁）に聞いたり，姑のを見たりして覚えた」と振り返った。このように，上述した御手洗町の食生活の特徴は，農村から御手洗町に嫁入りした綾江さんにとって，明確な差異として感じられるほどに大きかったといえる。

Ⅴ　むすびにかえて

本稿では，近世に「中国無双」とも謳われる瀬戸内海屈指の廻船寄港地であった御手洗町を取り上げ，当該地域が近代以降急激に衰退したとする，従来の見解を再検討することを試みた。具体的には，当該地域の変化に大きな影響を与えたとされる，昭和33年（1958）の売春防止法施行を一つの画期とみて，その前後の景観や暮らしの復原を通して，かつての廻船寄港地として繁栄のなごりを留めていた昭和20年代以前の時代の特徴を明らかにすることを目的とした。その結果は以下のように要約される。

御手洗港では，近代に入って，取り扱う品目や量は減少したものの，鉄道輸送網が発達する以前には米，また明治後期以降には，鉄道輸送に適さない材木類を主要品目とする中継商業港として，一定の機能を維持していた。廻船の停泊を背景に，昭和20年代以前の御手洗では，船員を対象として，築地通りを中心に歓楽街が形成されていた。歓楽街の活況がもたらす富は，接待の場としての飲食店や，芸娼妓の暮らしと関わりの深い呉服店や小間物店にとどまらず，飲食店へ食材を供給する酒店や食料品店，ひいては御手洗町全体にまで及んだといえる。また，このような活況を呈した昭和20年代以前の御手洗町は，御手洗経済圏と呼ばれる周辺村落への物資の集散機能をも有しており，御手洗経済圏内の地域住民にとって，御手洗町が依然として重要な中心地であった。

昭和20年代以前において，御手洗町の食生活が，周辺農村よりも高い水準にあったこともまた，御手洗町の経済的繁栄を裏づける一つの指標となり得よう。また，第二次世界大戦後における洋食や西洋野菜の普及は，港町の食料品店が中央や先進地からの新たな食文化の要素を移入する窓口としての機能を有していたことを示している。

以上の事実から，御手洗町は，近代以降も様々な機能を維持しつつ，少なくとも売春防止法が施行される昭和33年頃までは，活況を呈していたことが指摘できる。このことは，近世から近代への移行期が御手洗町にとって１つの大きな転換期ではあっても，決定的な衰退の契機ではなかったことを示しているといえる。

付　記

本稿の作成にあたり，豊町教育委員会をはじめ，長濱要悟氏，八重垣正夫氏には，調査の便宜をはじめ，多くの資料の提供とご教示を賜りました。また現地調査では，小草綾江氏，平井貞子氏，大瀬戸　時氏をはじめ御手洗町の多くの方々にご教示を賜りました。また現地調査の際には，日本語・日本文化学類の平澤亜希子，増田百恵，加藤民恵の３氏（当時）の協力を得ました。以上記して深く感謝申し上げます。

注および参考文献

１）後藤陽一編（1962）：『瀬戸内御手洗港の歴史』，御

手洗史編纂委員会。
2）谷沢　明（1991）：『瀬戸内の町並み－港町形成の研究』，未来社。
3）豊町教育委員会編・発行（2000）：『豊町史』。
4）前掲1），16～25。
5）木村吉聡（1981）：「おちょろ舟終えんの記」。
6）前掲3），105ページ。
7）文政12年，「国郡志御編集下弾書出し帳」，前掲1），（別編史料），577～602。
8）前掲1），22～23。
9）①前掲1），244～257。②前掲2），120～126。
10）本稿において各品目の多寡を検討する場合，とくにことわりのない限り，単位が統一されている金額を基準とする。
11）前掲1），258ページ。
12）前掲1），254ページ。
13）前掲2），121～122。
14）①村上節太郎（1955）：広島県大長村の専業的柑橘栽培－特に渡り作について－，地理学評論53-1，51～61。②有元正雄（1985）：広島県豊町における柑橘栽培史－戦前を中心として－，広島大学文学部内海文化研究紀要13，1～22。
15）「おちょろ舟」と呼ばれる小船を漕ぎ，芸娼妓を乗せて寄港船まで行き，客となる船員との交渉をするために，置屋に雇われていた人足のことをいう。
16）前掲1），286～290。
17）前掲2），104～106。
18）前掲1），213～215。
19）前掲1），290～291。
20）前掲2），116～117。
21）御手洗町では，芸娼妓のことを「ベッピン」と呼んだ。
22）①前掲2），117ページ。
23）御手洗町の6軒（鞆田家・木村家・北川家・村尾家・今田家・懸川家）の造船業者の共同出資によって経営されていた。
24）前掲2），105ページ。
25）平井貞子氏（加藤呉服店経営者のご息女）のご教示による。
26）大瀬戸　時氏（大瀬戸小間物店経営江者のご息女）のご教示による。
27）加藤晴美（2009）：大崎下島御手洗における花街の景観と生活，歴史地理学野外研究13，101～111。
28）昭和31年（1956）に御手洗町・大長村・久友村が合併して豊町が成立した際，豊町役場は旧大長村に設置された。
29）御手洗町の戸数と人口は，昭和30年（1955）当時326戸・1,239人であったが，昭和60年（1985）には206戸・555人，平成12年（2000）には166戸・340人にまで減少した。
30）平井貞子氏のご教示による。
31）昭和2年（1927）における御手洗町の戸数は283戸，人口は1,601人であった。
32）「ろ市商店」については，八重垣正夫氏作成の「土地利用図」には記載されていないが，①綾江さんが小草家に嫁入りした昭和10年代には現在の場所にあったこと，②御手洗町の「商工会加入書（昭和36年）」によって同商店が大正7年（1918）に経営を開始していることが確認できること，などから判断して，第4図・第8図および第9図には，「ろ市商店」を記載した。
33）御手洗町周辺では，練製品のことを「天ぷら」と呼ぶ。
34）ここでは，野菜類の中にイモ類を含めることとする。
35）御手洗町周辺では，小型のサメ（サメの子）を「ノウクリ」と呼ぶ。
36）①前掲14），①。②前掲14），②。